

教職実践演習における学校論（2016年度）の実践報告

Report on Discussion around School in “Practical Study of Teaching Profession (2016)”

諏訪 哲郎*

SUWA Tetsuo

1. はじめに

教職課程科目「教職実践演習」の趣旨について、文部科学省は「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外でのさまざまな活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される」ⁱと述べ、科目に含めるべき「教員として求められる事項」として、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項の4つを示しているⁱⁱ。

学習院大学の「教職実践演習」では、文部科学省の示している趣旨を踏まえて、山崎準二、宮盛邦友、諏訪哲郎、久保田福美の4人の専任教員が、それぞれ教師論、生徒指導、学校論、教科指導を担当する中で、上記の4つの事項をすべてカバーする構成となっている。2016年度の履修者は約120名で、4クラスに分けて開講した。

筆者の担当する「学校論」では、上記の4事項のうち、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項の2つを重視し、「社会の変化と学校の役割」「教職員と共同した学校運営」「保護者・地域との連携」という大枠を立てつつも、それらに関する体系的な知識の再確認よりも、教職課程履修の集大成として、「学校って一体どんなもの？」ということ再度考え直してもらうことに重点を置いて進めた。演習の形態も想定される授業形態の一つとして文科省が示している「ある特定の教育テーマに関する実践事例について、学生同士でのグループ討議や意見交換、研究発表などを行わせる」ⁱⁱⁱ形態を軸に展開している。ただし、テーマ設定にあたっては、2015年12月の中央教育審議会答申でこれからの学校教育の在り方として示された「チーム学校」や、次期学習指導要領の理念として示された「社会に開かれた教育課程」を意識させるために、全体としては、今日の学校が抱えている課題や学校の多様性を確認させながら、「未来の学校」の在り方を考えさせるという流れで構成した。

以下では、2016年度の授業実践の内容を紹介し、最後に全体を通して振り返り、今後の課題を述べる。

* 学習院大学文学部教育学科

2. 第1回：「学校を中心に据えたウェビング」と「教育実習で知った学校の真実」

学校論の初回は、一口に「学校」と言っても、各人の関心や経験によってさまざまであることを、確認してもらうことから開始した。その手法として採用したのが、**学校**を中央に据えた「ウェビング」（あるいは「メンタルマップ」）の作成である。

学校論の冒頭で、「今日から3回は「学校」について、主に授業参加者によるディスカッションを中心に進めていきたい」と述べた後、学科の異なる男女混合の4人グループを作らせたあと、個人作業としてウェビングの作成をさせた。導入としての位置づけであるので、約7分間という短い時間で作業をさせたが、その間に10個足らずの単語しか書けなかった者から紙面全体を覆いつくすように40項目ほどの単語を書いた者までさまざまであった。中には、勉強にかかわるものは皆無で、部活や行事や交友関係で終始しているものも見られた。

約7分経過後、ウェビング作業を終わらせて、4人グループがそれぞれどのようなことを書いているのかを確認させるために、ワークシートを左側の人に渡して内容をざっと確認させた。約20秒経過したところで、さらにワークシートを左側の人に送らせ、同じ作業を3回繰り返させて終了。「学校と言っても、人によってさまざまなイメージでとらえていることを確認できたと思う」と締めくくった。

導入のウェビングの作業後に設定したのが「バズ・タイム」。日本環境教育フォーラム代表理事の川嶋直氏は「ペチャクチャタイム」と名付けている。初対面の人たちがこれから取り組む協働作業をリラックスして進められるように、自由・勝手に話をする時間である。まず、「バズ (buzz) ってどういう意味か知ってる？」と英語英米文化学科の学生に確認して、「そう、ハチがブーンと羽音を立てるように、みんなでおしゃべりをしてください。私が、アア五月蠅い！と感じるぐらいにね。最初簡単に自己紹介して、そのあとは自分の自慢話でも、部活のことでも、就職先のことでも中身はなんでもかまいません」と言って始めさせる。約3分後には、どのグループからも笑顔と笑い声が聞こえてくるので、そこで「バズ・タイム」は終了する。この「バズ・タイム」は、グループの組み合わせを変えた2回目、3回目の授業でも取り入れている。今後教職に就いてグループ作業を取り入れる場合にも、まずリラックスした環境づくりが大切であることを、身をもって経験させるという意味も込めている。

そのあと、次のアクティビティへの準備のために、しばらく目を閉じてもらい、教育実習を振り返ってもらった。「教育実習の初日、いつもより早起きして実習校に向かったと思います。校門を入るとき緊張しましたか？」「自分よりも先に学校に来ていた先生への最初の挨拶はにこやかにできましたか？」「担当するクラスに最初に入った時の印象はどうでしたか？」「初日は校長先生や教務担当の方から講話があったのではないですか。どんな話だったか覚えていますか？」と初めのうちは語り掛け、あとは目を閉じさせた状態で、2～3分間、教育実習時の出来事を思い出してもらった。

次に、「教育実習で知った学校の真実」というワークシートを配布し、約10分間でワークシートに記入させる。ワークシートには、「教育実習を経験したことで、あなたがこれまで知らなかった学校の姿を発見したと思います。新鮮であったり、驚きであったり、興味をひかれた「学校の真実」を、少なくとも2つ記してください。」と書かれている。その通りに読み上げながら、これからの作業の中身を理解していることを確認する。約10分間経過し、10行分の空間の埋まり具合が不十分な場合には、作業時間を1～2分追加することもある。

個人作業が終了すると、各人が書いたことをグループ内で発表し、意見を交換する時間となる。その冒頭で、「これから15分間は、グループ内で自由に「学校の真実」について話し合ってもらいますが、話し合いの後の発表について、あらかじめ伝えておきます」と述べて、「グループディスカッションの後の発表では、各グループで話し合った事柄の中で、特に興味深く、クラス全員に伝えたいと思うものを2つ、なるべく違う人が話したことを選び、話題提供者の左側に座った人が発表すること。発表時間は1分半で、その時間内に二人で2つの事柄を紹介するように」という指示を事前に与えておいた。話題提供者が発表するのではなく、左隣の人に発表させるのは、話し合いの中で他者の発言を集中して聞く態度を育みたいという意図によるものである。集中して聞くために、「なるべくメモを取らずに話の内容を記憶するように！」とも促した。

話し合い終了後の発表では、さまざまな「学校の真実」が披露された。受講生は改めてさまざまな学校があることを知り、自分が学んだ学校、そしてそれと重複することの多い教育実習校が、多様な姿を有する学校のある一部の姿でしかないことを認識することになる。中には、筆者にとっても、「えーっ？本当にそんなことがあったの？」と驚かされるような実態が披露されることもある。以下に発表内容の一部を紹介する。

- ・明らかに質の良くない授業をしても、年輩だからと他の先生が指摘できない。
- ・私立の学校では、生徒の獲得のために学校の特色をアピールするのに熱心だった。
- ・生徒間のトラブルを先生は何も知らないと思っていたが、実は先生は生徒のことをよく見ていて、生徒グループの分裂や友達関係が微妙になっていることまで見抜いていた。
- ・先生同士で飲み会が頻繁に行われていることに驚いた。
- ・教員間の派閥。私立だったためか、それが露骨に表れていた。
- ・不登校の生徒が想像以上に多かった。
- ・職員室で副業と思われる不動産の賃貸取引の電話をしている先生が複数いた。

なお、ワークシートに書かれた事柄としては、学校の先生の授業以外の仕事の種類の多さや労働時間の長さ、先生方の生徒についての情報交換の多さを指摘するものが圧倒的に多かった。特に、教員の多忙さに触れた記述は、受講生の8割ほどに達していた。ある学生は、「教師は時間との闘いであることに気づかされた。授業、HR、採点、テスト準備、教材作り、予備実験、事務処理、部活指導と関わらなければならないことがあり（中略）教師の辛さを知った」と書いている。

また、「授業形態が変わっているのに驚きました。私の時は、教師が話し生徒が聞くという講義形式ばかりでしたが、生徒同士の話し合いが多くなっていました」といった授業形態の変化の指摘も少なくなかった。2014年11月に文部科学大臣が中央教育審議会に対して次期学習指導要領についての諮問を行い、そこで、「アクティブ・ラーニング」という言葉が4回も登場して初等中等教育界に衝撃を与えたが、挙手で確認したところ、実習先の学校でアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れているところは4分の1ほどに達していた。中には、「校長からアクティブ・ラーニングを意識して取り入れるようにと指示される一方で、指導教諭からは従来型の授業をするように言われ、はざまに立たされて困った」という発言もあった。この1年間で中学高校にアクティブ・ラーニングが急速に浸透していることは、教育実習記録の中にアクティブ・ラーニングに関する記述が多かったことから確かである。

本時の振り返りとして、最後に「ディスカッションを通して、印象深かったほかのメンバーの発言を、少なくとも2つ以上書いてください」という欄に記入してもらったが、「派閥の存在に驚いた」という意見が多数みられた。多くの受講生が公立の中高で実習をして

いるので、私学の教員の中に派閥があるという発表は、想定外だったようである。教育実習に3週間行ったことによって、「学校と言うものはこんなものだ」と思い込んでいた学生に、自分の行った実習校とまったく違う学校が存在していることを認識させたという点でも意味があったようである。

3. 第2回：学校が転換期にあることの解説と「望ましい学校の姿」

第2回目は、前回の授業で学校が多様化してきていると認識した受講生に、その理由を解説することから始めた。その概要は以下のようなものである。

学校の多様化の理由もいくつかある。少子化の中で私学が競争力強化のためにさまざまな工夫を始めていること、公立校も近年の校長の権限強化によって、学校ごとの独自の色彩が明確になってきていることもその要因である。しかし、今、世界中で教育改革の大きなうねりが生じており、それを積極的に取り入れようとしている学校と、昔からのやり方を踏襲している学校との間で大きな違いが出てきている。

すべての国民を学校に通わせて、国家にとって有意な人材を大量に育てる近代公教育制度は19世紀の後半に欧米で始まり、日本にも明治5年（1872年）に導入された。多く子どもたちを教室に集め、一人の教師が教壇に立ち、時間割に従って教科の知識を黒板と教科書を使って与え、その修得を試験制度で強制するという方式である。近代公教育制度が誕生した時期は、国民国家という国家形態が定着するとともに、産業革命を経て物資の大量生産が定着してきた時期で、まさに大量生産方式を人材の育成にも応用したといえる。そのシステムの維持のために、師範学校を作って教員も養成していった。

そして、その近代公教育制度はそれから150年近く経過した今日もなお、相当多くの部分が原型をとどめている。しかし、この150年間の社会の変化は著しい。例えば、1880年ごろの日本の第一次産業人口比率は80%以上であったが、2010年の国勢調査では4%にまで減少している。ガソリンエンジンの自動車は1885年に実用化されたもので、飛行機も、ライト兄弟が有人飛行を成功させたのは1903年のことである。つまり、今日にまでその基本的な姿をとどめている近代公教育制度が誕生したころには、ほとんどの人が第一次産業に従事し、飛行機どころか自動車もほとんど走っていない時代であった。効率的な人材育成方式であったために100年以上にわたって継承されてきたが、この30年余りの間のグローバル化と情報化の進展は、19世紀型の学校教育を大きく変えていくことになった。20世紀末に欧米で始まった学習方法の改革は、日本にも徐々に導入されているが、次期学習指導要領ではアクティブ・ラーニングという名称でより一層強調されることになった。学習方法の改革の次に押し寄せているのが学習内容の改革である。社会の変化とともに登場してきた新しい教育課題への対応も必要になってきている。地球環境問題や民族間の文化的軋轢のように世界にはほぼ共通する課題もあるが、特に、日本では少子高齢化による急激な人口減少が見込まれており、「持続可能な社会づくり」や「多文化共生」は重要な教育課題となっており、次期学習指導要領で一段と強調されるようになっている。教育の在り方も、学校教育中心から多様で重層的な教育制度に転換する可能性がある。

上記のような解説に続いて、第2回目は「望ましい学校の姿」を考える活動に移っていった。前回と異なるメンバーによる男女混合の4人グループを作らせ、まずは約3分間のバズ・タイム。その後「望ましい学校の姿」というワークシートを配布して、約10分間でワークシートに記入させた。ワークシートの上部には、

「望ましい学校の姿」とはどのようなものでしょうか？きっと、あなたの置かれている立場によってかなり違っているでしょう。あなたが以下の4つの立場に立っていたと想定して、「望ましい学校の姿」を描いてください。

と書かれており、その下には、

1. 在学生であるあなたにとって「望ましい学校の姿」とは？
2. 教員であるあなたにとって「望ましい学校の姿」とは？
3. 保護者であるあなたにとって「望ましい学校の姿」とは？
4. 為政者であるあなたにとって「望ましい学校の姿」とは？

という4つの問と、それぞれに4行分の記述スペースを設けている。

10分間の個人での記入作業のあと、約15分間のグループディスカッションをさせる点も、グループでの発表を各グループで上記1～4の中から2つを選んで1分30秒を目安とした点もほぼ第1回目と同じである。

発表においては、ほかのグループの発表内容との重複を避けようとするため、やや奇を衒った内容のものもあるが、各個人のワークシートを見ると、1の在学生にとっての「望ましい学校の姿」は、総合すると、「仲の良い友達が多く、夢中になれるがハード過ぎない部活動があり、いじめのない、毎日通いたくなる学校」にほぼ収斂される。「家庭以外のもう一つの居場所」「教員が生徒にきっちりと向き合い、依怙最良のない学校」といった観点からの記述もある。学習指導面での水準の高さや授業のわかりやすさを求める意見もちらほらあるが、決して多くはない。

2の教員にとっての「望ましい学校の姿」についても、総合すると、「教員同士の連携はもちろん、地域の方々や保護者との連携もよくとれていて、不登校やいじめといった問題もなく、働きがいのある学校」という枠に大方の意見は収まっている。しかし、「多種多様な教員がおり、さまざまな角度から子どもの成長を促せる学校」という受益者サイドに立った意見や、「学校の設備、授業で使える機材・備品の充実」、「授業の準備に十分に時間を使える学校」、「部活の指導を含め、労働に見合った給与」といった職場環境や労働環境を取り上げた発言も少なからず見られた。教育実習での自分自身の経験と、ディスカッションを通して知ったほかの学校の実情などから、実際に教員として勤務する上での無視しがたい側面に気づいた結果と思われる。ただし、例えば「規律を教えなくても、善悪の判断のつく子どもがいる学校」といった、少々身勝手な意見の記述も見られた。

3の保護者にとっての「望ましい学校の姿」については、「子どもが楽しそうに通っている学校」と「子どもが安心して過ごせる学校」が双璧で、続いて「子どもの学業成績を伸ばしてくれる学校」「情報が公開され、透明性の高い学校」という意見も多かった。また、「受験指導などの面倒見のいい学校」を望む声がある一方で、「学校としてすべきこと（だけ）をきちんとしてもらえる学校」で十分という意見もあった。少数ながら、「経済的な負担の少ない学校」という記述もあった。今日の貧困率の上昇を考えると、出てきて当然の意見であろう。

4の為政者にとっての「望ましい学校の姿」については、半数以上の受講生が「優秀な人材を育成する学校」という観点から記述していたが、「世界に通用する高水準の教育で、優秀なグローバル人材」「将来の日本を背負う優秀な人材」を育むことを望む国政的な観点からの記述だけでなく、「大人になった時に地域に貢献してくれるような人を育ててくれる学校」という地方議員的な記述も見られた。その一方で、半数以上が、「いじめなどの問題を起こさない学校」が望ましいと答えている。「問題を起こさない学校」についての記述からは、そのような問題の発生による被害者への共感を関じさせるものばかりではな

く、問題の発生による悪評や矛先が為政者自身に向かうことを避けたいという、事なかれ主義的な為政者を揶揄する記述もみられた。「国のめざす教育方針を実現してくれる学校」「学習指導要領に忠実な授業をする学校」という記述も数件あったが、逆に「中央集権的・管理主義的な教育政策を改め、各学校に最大限裁量権を委譲し、学校を自立させていくことが重要」との指摘もあった。そのような意見を受けたグループ内での意見交換の中で、「地域ごとの教育の特色があるのはかまわないが、ある程度は日本全体で均一であることも重要という意見が出されたことも全体発表で示された。

4. 第3回：「未来の学校」と自分

第3回目は、学校の将来の姿をさまざまな角度から考えてもらうことを意図した。

まずは第1回、第2回と同様に、まだ一度も同じグループになっていない4人のグループのグループを作ってもらい、約3分のバズタイム。そして「学校の未来」と名付けたワークシートを配布。ワークシートには上部には次のように書かれている。

約150年前に誕生した近代教育が、その後の社会の大きな変化の中で、いま大きく変わろうとしています。これまで学校の中であって当然と思っていたものが50年後にはなくなっていたり、大きく変わっているかもしれません。以下のことがらについて、50年後にどのようになっているかを大胆に予想してください。

その下には、

先生と生徒

教科と教科書

クラスと教室

学校と地域

() 例：いじめと不登校、部活、制服、校則etc.

の5項目とそれぞれの下に3行の空欄を設けている。5番目の()には例を示したが、受講者各自が思い思いのテーマを書き込み、その将来像を描くというものである。

ワークシートへの記入に先立ち、おおむね以下のような話をした。

50年後というと、「もう一線から退いているからどうでもいいや」と思うかもしれないが、少子化によって65歳以上の高齢者人口比率が40%に迫ろうという時代である。「65歳で退職して悠々自適の生活に」というのは大間違い。きっと75歳までは働かざるを得ない時代になっている。ただし社会は大きく変わっていると思うので、大胆に予測して書くように。

10分間の個人での記入作業のあと、約15分間のグループディスカッションをさせる点は第1回目、第2回目と同じであるが、なるべく多くの人に発表の機会を与えたいと考え、各グループに40秒×3項目を発表させることとした。また、限られた時間内での発表に慣れてもらうため、全員に1項目ずつ分担させ、発表前に40秒間の発表練習を2回させて、分量の調整を行わせた。

最初の「先生と生徒」については、発表においても各人の記述においても、雑多な推測が見られたが、推測の根拠が示されたり想定できるものは、おおむね4つの枠組みに分類できる。そのうちほぼ半数の受講者が取り上げたのは、科学技術、特に情報通信技術 (ICT) の進展による授業の変質である。授業がインターネットなどの映像を通して配信される、あるいはロボットが授業行うようになるという推定で、その結果、生徒は好きな先生の授業を選択できるようになるが、生徒が先生と顔を合わせる機会が減少し、先生と生徒の距離が遠くなる、というものである。第2の枠組みは、現在進行している学習者主体の学び

がその後もどんどん進展し、教師の役割が「教える」主役から変質し、「学びを促す」ファシリテーターや、「相談に応じる」カウンセラー、あるいは学習をサポートするだけの学習補助員になっていく、さらには先生と生徒の関係が「学びあう関係」になるといったものである。科学技術の進展によって先生の教科を教えるという役割が縮小する結果、先生の役割が規範を教えたり、哲学を教えるだけに限定されたものになるという推定も見られた。第3の枠組みは少子化から導き出されたもので、生徒数の減少によって「個」に対応した授業が行われたり、1クラスに2人の担任がついたりというもので、その場合は、先生と生徒はより近い関係になるという。学校の統廃合が進んで校区が広がることから公立校でも生徒の寮生活が当たり前になるという推測や、クラスメートが少なくなる寂しさを解消するために、先生のみならず生徒数を増やすためにロボットが登場するというユニークな推定も発表された。そして第4の枠組みは、社会のグローバル化の進展からの帰結で、外国籍の先生や生徒が増えるというものである。生徒の国外への流出が進む、という推定も見られた。そのほかに、さまざまな経歴の人が先生になるという、学校教育が社会に開かれていくという流れからの推定も見られた。

2番目の「教科と教科書」のうち教科については、情報化とグローバル化の進展で情報科目（特にプログラミング）と外国語科目の一層の重視を指摘するものと、新たな教育課題に対応するために教科・科目が増えると予測するものが多く、新たな教科・科目としては第二外国語（特に中国語）、プレゼンテーション科目、企画科目、キャリア関係科目、地域関連科目、エネルギー開発、人間学、機械学、卒業研究などが挙げられた。ユニークなものとしては、「遊び」科目を書いたものがいたが、さまざまな教育課題が洪水のように押し寄せる中で、本当に必要なものは、子どもの本務である「遊び」ではないかと感じさせられた。また、食料生産や遺伝子操作などの体験的・実習的な内容の増加の指摘もあった。これらの教科・科目増への対応方法として、従来の教科・科目の横断や統合という合教科・合科目化の進展を予測するものが多く、最終的に、humanitiesとscienceに収斂されると述べたものもいた。一方で、すべてを学びきれなくなることから、分野が特化された専門学校化が進むと予測したもの、体育、音楽、家庭科の廃止を予測したものがあつた。また、一人だけであるが、「詰め込み教育」の復活を書いたものもいる。

教科書については、ほぼ全員がデジタル化の進展を指摘し、ヴァーチャルな3Dが空中に表れる教科書の登場まで推測していた。デジタル化の結果として、紙媒体の教科書の消滅を予測するものと、紙媒体との併存を予測するものに分かれた。併存派の「なんだかんだと言っても紙媒体が見やすい」という意見には思わず同感。アクティブ・ラーニングの増加などから、統一的な教科書がなくなり、各出版社が自由に教材を刊行するようになるという予測とともに、それでも教科書検定は存続するという予測もあつた。

3番目の「クラスと教室」では、多くの受講生が、授業内容がインターネット等でデジタル配信され、自宅学習が増加して教室に行く頻度が減少すると予測している。情報通信技術の発展だけでなく、少子化による地方での学校維持の困難さもそれを促進するという。その結果、教室が不要になり、クラスという概念も消滅するという予測もあるが、それは少数派で、集団生活のためのクラスは存続し、教室も割り当てられるという予測の方が多い。学びの場というより憩いの場になるという予測もある。単位制が進むことで生徒の授業ごとの教室移動が恒常化し、ホームルームは小学校の低学年のみに設定されるようになるという予測や、ホームルームは単なるロッカールームに代わるという予測も出された。他方で、アクティブ・ラーニングの浸透がクラスの団結力や一体感を強めるという記述も見られた。

教室の形態については、黒板の消滅を指摘するものが多く、机にパソコンが組み込まれているとする予測も少なくない。机の配置についても、いわゆる一斉授業型の配置は消滅し、アクティブ・ラーニングや対話に適した配置が主流になるという、すでに進行している事実を記したのも見られた。少子化の帰結なのか、異年齢集団活動の意義を重視した結果なのかは判然としないが、クラスが2学年単位になる、あるいは学年の境がなくなってさまざまな年齢の子どもたちが一緒に学ぶという予測もあった。

4番目の「学校と地域」については、大部分の受講生が両者のつながりの強さが将来どうなるのかについて記述をしており、両者をそれぞれ別に記述したものはわずかであった。結論から先に述べると、両者のつながりが希薄になると予測したものが約6割、つながりが強くなると予測したものが約3割、その他が1割であった。つながりが希薄になるという予測の根拠としては、オンラインのデジタル配信による授業が増えて、子どもたちの登校頻度が減り、その影響が学校と地域の交流を希薄化させるというものが多く、それに次いで、人口減少による学校の小規模化や廃校によって、地域を巻き込んだ運動会のような行事が継承されなくなるというものがいくつか見られた。また、学校の小規模化の帰結として、教師の分校への巡回派遣が増えるという予測を数人が記していた。逆に学校と地域の関係が密になるという予測の根拠に挙げられたのは、放課後の活動を地域が担うようになるという意見、キャリア教育などで教員ではない一般人による特別授業が増えるという意見、学校が地域との交流のための複合施設化するという意見、さらには、学校外の商店街や老人ホームなどが教育の場として活用され、町や地区全体が学校として機能するという未来像を描いたものもいた。

学校そのものの変化に言及したものとしては、学校の役割の多様化の指摘がいくつかあり、地域に貢献する人材育成に特化した学校の出現予測や、書店が消滅しつつある中で、学校が知識の中核拠点化するという予測がみられた。

最後の自由記述欄には多種多様な記述がみられたが、特筆に値するものを以下にいくつか列記する。

- ・フリースクールのような自由度の高い学校が増えていく。
- ・携帯電話は持ち込み禁止からコミュニケーション手段として必携になる。
- ・授業形態の多様化により、授業時間枠も流動的になり、学校からチャイムが消える。

5. 授業の進め方に対する受講者の感想

第3回目の授業の最後の15分～20分間は、しっかりと授業に参加したかどうかを確認するという名目の「確認テスト」を実施した。そこには

わずか3回でしたが、今回の教職実践演習「学校論」の感想を書いてください。特に、ディスカッションと発表中心の授業の是非についても触れてください。

という項目を設けた。

その結果は、9割以上の受講生が、おおむね「異なる学科の人とのディスカッションで、さまざまな角度から学校について考え、新たな発見や触発されることの多い授業で、有意義であるとともに楽しかった」という、今回の授業形態に賛同する意見を書いている。以下、実際の記述をいくつか抜粋して紹介する。

- ・3回の授業で、他の参加者の考えていることの多様性を知りました。やはり一人で考えることには限界があるので、いろいろな意見を聞き、すり合わせて発表し、意見を共有するのは重要だと思います。
- ・「学校」と一口に言ってもその側面は多様で、別の視点から見ると全く異なる考え方が

出てくるということに驚きました。“どれが正しい”というのではないのだと思いますが、現在の学校、過去の学校、将来の学校が、どのような論理で、どのような過程を経てつながっていくのかということにとっても興味がわきました。

- ・月並みな感想になってしまうが、自分とは違う考えや意見に数多く触れることができ、自分の視野が広がるのを実感した。
- ・今の学校、未来の学校、理想の学校とは何かを見つめることは、学校の一部としての「先生」というものを考えるうえで、とても重要なのではないかと毎週感じていました。
- ・ディスカッションは普段やり慣れてないので大変緊張しましたが、それでも社会人になるうえでは必要な能力であると思います。大変良い機会となりました。
- ・今、中高の授業でもアクティブ・ラーニングが唱えられ、生徒中心の思考や発言力が現場でも重視されていますが、まさにそのような授業だったと思います。
- ・山崎先生の授業では、個人としての振り返りが多く、個の内面を見つめる機会となったのですが、この授業では（中略）外面からの視点を得ることができました。その点からいえば（中略）両者一体でこそ意味のあるもので、教職実践演習のオムニバスという形式をうまく活用できたものであると思います。
- ・一言で表すなら楽しかった。毎回与えられたテーマの意義深さ、グループ内の意見交換で得られる新しい世界、そしてグループで一つの目的に向かって交流をしたということ自体が、「楽しい」という感想になったのだと思う。

意外にも、授業の本道ではない「バズ・タイム」「ペチャクチャタイム」への言及も見られたので、以下に紹介する。

- ・この授業形態は、（中略）打ち解けるまでが少し神経を使う気がします。しかし、それは「ペチャクチャタイム」により、従来より入りやすくなっていました。
- ・毎回ペチャクチャタイムがあったので、心なしかコミュニケーション能力が上がったような気がします。今日の授業に向けては、事前に話のネタを一つ考えておいたので、すぐに溶け込むことができました。大したことのない準備ですが、こうした姿勢で社会人になっても交流していきたいと思います。

当然ながら、授業の改善提案や要望も書かれている。

- ・内容が多かった印象を受けた。内容をもう少し絞って、発表後にもう少し深い話し合いができる授業だとよいなと思いました。

この意見については、担当者としても、そうしたいところである。しかし、限られた時間数の中で深さをとるか、広さをとるかは悩ましい。多分、深い話し合いのためには、より多くの時間とともに、クラスサイズもより小規模であるべきなのであろう。

「欲を言えばもう少し時間がほしかった」という記述があったが、「退屈」の対極にある意見と理解し、満足している。また、グループわけの時間がもったいないという観点から、グループ分けはあらかじめ決めておいてもらえるとよいとの意見があった。それだけディスカッションの時間を多くとりたいという思いの表れと受け止めているが、積極的に自分の所属学科を開示してグループを作る過程も、グループ活動の重要なプロセスと捉えている。

「もし、自分が教員になってこの授業を導入したら、上手く生徒の意見をまとめられるか不安である」との意見も記されていた。おそらく場数を踏んで、何度か成功体験を持てば、不安は解消すると思うが、アクティブ・ラーニングにおいては、教師が意見をまとめると意識をそれほど持つ必要はなく、すっきりと意見を整理するより、もやもや感が生徒の中に残るほうが効果も大きいのではないかと考えている。

「もっと先生の意見を聞きたかった」という記述や「発表もよいですが、先生のお話もなるほどという感じで良かったです。講義と発表のバランスが大切だと思いました」という記述もあった。アクティブ・ラーニングを導入した授業においては、教師が話す時間をとことん減らすことが成功のカギと考えているので、「もっと先生の意見を聞きたかった」というのはうれしい評価である。

「意見をまとめて毎回プリントにさせていただけたらもっと素晴らしい授業になったと思います」という意見も書かれていた。そうしたいのはやまやまであるが、授業期間中は多忙でそこまでの余力はない。今回、2016年度の教職実践演習の「学校論」を実践報告として『学習院大学教職課程年報』に寄稿することにしたのは、その要望に若干でも応えたいという思いからである。

以上述べてきたように、今年度の教職実践演習「学校論」は、おおむね好評であったと思っている。ディスカッションや発表の過程で受講生が頭脳を相当アクティブにしていたことは、各回の記述内容からも十分に窺われる。獲得した知識量という点でも、通常の授業3回分で得るものよりもはるかに多かったのではないかと推測している。

したがって、今回のような授業形態を教職課程の授業科目に取り入れることは適切であろう。しかし、それでは教員免許取得に至るまでに、教職課程で学び、修得しておくべきものをこのような授業形態の下で体系化できるかということ、そう簡単ではない。さまざまな大きな課題が立ちだかるであろうことは明らかである。とはいえ、19世紀型の教育方法からの脱却には、マイナーチェンジの積み重ねではなく、大きな発想の転換が求められているように感じている。

【追記】

「確認テスト」の後半には、

「2050年の日本の学校」というテーマで、未来予想や理想論、あるいは自分がその時点で学校と向き合っている姿などを、時間の許す限り自由に書いてください。

という欄を設けており、そこでの記述内容にも興味深いものが多かったが、論点が多岐にわたり、プライベートな記述も少なくなかったので、本稿では紹介を割愛した。

また、授業回数確保の観点から設けられた最終回の45分間では、ダイヤモンドランキング「30年後に学校からなくなっているもの」(A時間割、B黒板とチョーク、C紙媒体の教科書、Dクラス、E体育祭・運動会、F633制、G入学試験、H部活動、I修学旅行の順序付け)を実施したが、時間の制約から、なぜそのようなランク付けをしたのかを説明させる時間が十分に取れず、消化不良と感じたので、その紹介も本稿では省略する。

ⁱ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/attach/1337016.htm の「1. 科目の趣旨・ねらい」(2017年1月23日最終確認)

ⁱⁱ 同上

ⁱⁱⁱ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/attach/1337016.htm の「4. 授業方法等」(2017年1月23日最終確認)